

オンライン高大連携公開講座『津軽ライフ』

地理的空間を超える連携の試み

University-High School Open Lecture “Tsugaru Life”:

A Test Course for Bridging Geographical Distance

片桐 早苗, ソロモン・ジョシュア・リー,
ヤグノ・ライク, 多田 恵実

Sanae Katagiri, Joshua L. Solomon, Reik Jagno, Megumi Tada

弘前大学 教養教育開発実践センター
Center for Liberal Arts Development and Practices, Hirosaki University

Abstract

This practical report reflects on a global studies liberal arts class conducted as a university-high school open lecture, dissecting and analyzing the experience with an eye toward future university-high school collaborations and hybrid-style classes. While this type of class was unprecedented in the university, as collaborations and technologically-augmented class styles can be expected only to increase, the purpose of this report is to offer perspective for educators interested in teaching in similar environments in the future. It begins by introducing the steps leading to the course implementation and concept behind the syllabus, followed by an explanation of the reasons for choosing the textbook, schedule, and grading policy. Next, it discusses the special circumstances of hybrid-style teaching: concretely, the types of technologies implemented, the layout of the physical and virtual classrooms, technical issues and solutions, as well as the process for involving guest speakers and conducting a virtual museum visit. Finally, it introduces the perspectives of both high school and university students who completed the course.

Keywords: 高大連携, ハイブリッド型授業, 単位先行取得

背 景

高等学校と大学が連携することにより、高校生の大学における学修を高等学校の単位として認定することや、大学へ科目等履修生として高校生を受け入れること等、高校生が大学レベルの教育研究に触れることのできる各種取組は、現在、徐々に広がりを見せつつある（文部科学省，2007）。これに依り、高校生個々人に対する将来の進路選択に考察の機会がより多く与えられ、次の段階へのビジョンをより具体的・明確に示すことができ、生徒は早期に将来への指針をつかむことができるようになる。このような高大連携については各大学と高校とで様々な試みが各地でなされており、その形態も系統も多様である（岡山理科大学獣医学部，2018；京都大学，2022；国際教養大学，2021；東京工業大学，2021；日本大学工学部，2022；北海道大学，2016；山口大学，2022）。

2015年2月、弘前大学は青森県教育委員会との間において、相互の密接な連携・協力をする協定を結

んだ。また、弘前周辺地域の9校の高等学校とは高大連携公開講座の協定を結び、直接高校生が来学する形で大学の科目を履修する制度を開始した。この制度で単位を履修した高校生は既に2021年度までに80名に上る。

他方、文部科学省では2021年まで続いた教育再生実行会議において12次までの提言がなされたが、その最終盤には学びの多様化として、「高校生が大学の講義を学ぶ『先取り履修』の推進」が挙げられており、同様に「遠隔・オンライン教育の推進」として「ハイブリッド型教育の推進、MOOCや大学間連携などリソースの共有・有効活用」が推奨されている（文部科学省、2021）。

2020年コロナ禍で急速に進展したオンライン教育をきっかけに、大学が遠隔の高等学校とも教室をオンラインで結び、教育の機会として新たな高大連携の形とする、という本学教育理事・教育推進機構長の郡千寿子の発案により、オンラインでの高大連携が、まずは、弘前大学イングリッシュ・라운ジのセミナーを県内2校の高等学校に開放する試行として始まった（ヤグノ他、2022）。

更に2022年3月、弘前大学は青森南高等学校と高大連携に関する協定を結び、これにより弘前大学が従来、高校生に公開している講義の一部を、遠隔地からでも高校生がオンラインで受講できる初めての試みとなった。大学での学びについて具体的なイメージを膨らませ、進路決定への一助とすることができると期待があり、教育推進機構、教養教育開発実践センターのイングリッシュ・라운ジの教員がこの任にあたった。

シラバス構築

シラバスデザインにあたって担当教員で協議したことを、その順に記す。高大連携講座であること、またハイブリッド型授業であることから、教科書の選択、開講時期の設定、また、機械設備の設営、システム構築、ゲストスピーカーを招いての授業についてもそれぞれ以下に記述する。

シラバスデザイン

本授業は内容言語統合型学習であるため、内容と言語学習の均等性を計ってシラバスを組んだ。そこで各回がそれぞれ理論、スキル、ゲストスピーカー、そして教科書を中心としてテーマを定めた。理論（「場」と「空間」の違いについて）及びスキル（インタビュースキル、ポスター発表のスキル）の授業が5回、コンテンツとなる教科書及びゲストスピーカーの授業が7回、学生による発表が2回となった。試行としてハイブリッドで行うため、第一回目のガイダンスで授業概要、教員紹介、学生の自己紹介などの他に、ハイブリッド授業に必要な技術の説明をするための時間を確保した。また、高大連携ということで、大学教育というのは受動的に吸収するものではなく、積極的に高度な概念に取り組む形態の教育だと意識させ、本授業の中心となる概念である「場」の考察を行った。さらに第2、3回目以降も、その基本概念に振り返る機会を適宜盛り込む方針を決めた。集中講義ということで、調査研究するようなプロジェクトを実施する時間の確保が困難なことが予測され、代替として中間プロジェクトをインフォーマルな準備研究とし、最後のポスターセッションにおいて同じテーマを深掘りすることとした。それによって教員やクラスメートからのフィードバックを取り入れる余裕を確保することを目指した。

表1 シラバス

第1回 8/9 (火) 14:20-15:50	ガイダンス
第2回 8/9 (火) 16:00-17:30	Theme introduction: Thinking about Nature
第3回 8/10 (水) 14:20-15:50	Theme introduction: Thinking about “The Mundane”
第4回 8/10 (水) 16:00-17:30	インタビュースキルについて Interview Skills
第5回 8/17 (水) 14:20-15:50	弘前れんが倉庫美術館 バーチャル見学 Online visit to Hirosaki Museum of Contemporary Art
第6回 8/17 (水) 16:00-17:30	Textbook: Unit 1 Natural Wonders “Anmon Falls”
第7回 8/18 (木) 14:20-15:50	中間プレゼンテーション
第8回 8/18 (木) 16:00-17:30	Textbook: Unit 3 Performing Arts “Tsugaru Folk Singing and Tsugaru-jamisen”
第9回 8/19 (金) 14:20-15:50	Textbook: Unit 5 Groundhopping “Hokushindo”
第10回 8/19 (金) 16:00-17:50	弘前の古武道 Hirosaki Traditional Martial Arts (ゲストスピーカー)
第11回 8/22 (月) 14:20-15:50	最終プレゼンテーションの準備 Final Project Preparation, Textbook
第12回 8/24 (水) 16:00-17:30	Textbook: Unit 4 Good Eats “Tsugaru Soba”
第13回 8/26 (金) 16:00-17:30	Textbook: Unit 2 Sweet Tooth “Wagashi”
第14回 8/29 (月) 16:00-17:30	ポスター発表準備・練習
第15回 8/29 (月) 17:30-19:00	ポスターセッション

教科書

令和3年3月、当イングリッシュ・ラウンジより出版した『Tsugaru Life –English through Local Topic』並びに、令和4年3月に出版した『Tsugaru Life Workbook』を使用した。オンライン授業で画面共有や音声共有する際、著作権が問題になるので、我々が著者である教材を使うことにした。

開講時期

表1が示すように、8月大学の夏季期間中の集中講義となった。考慮すべき点としてまず、1) 大学と高等学校間のスケジュールの違いのすり合わせを行った。あくまで、大学の授業として開講しているので、大学の授業開講期間（集中講義期間）であることが必須であり、高校生の授業の履修期間の半分は高校生の夏休み期間を利用できるような時期を選ぶことにした。2) 時間帯としては、高校側の夏季講習や夏季休暇中の部活の練習がない時間帯、3) 後半部分では高校側の授業が始まるので、放課後に設定をし、高校生の負担を軽減した。結果、このように通例の大学の集中講義とは異なり、8月3週にわたり広がる形となったが、双方に無理がないよう、配慮した形となった。

成績

クラス内活動 50%

中間プロジェクト 20%

期末プロジェクト 30%

クラス内活動は、授業内での発言状況、授業後はMicrosoft Forms（以下、Forms）を用い、Reflection Sheetとして振り返り活動を行った。振り返りの内容としては、「授業で理解した内容を自分の言葉でまとめる」、「授業の理解」を1) 50%, 2) 75%以上, 3) 90%以上を選択、「授業に関する質問」とした。提出の有無、内容を教員全員で検討し評価した。使用言語は英語・日本語の指定をせず、Reflection Sheetの指示文も両言語併記とした。高大連携事業であったことから、細やかな理解度の確認のため、また質問等をしやすくするためにも授業日毎に行った。

中間プロジェクトでは、調査対象をえらび、どのように調査を進めるかポスターを作成し、英語で発表した。全教員参加して発表を聴き、さらにその場で個別にフィードバックを行った。

期末プロジェクトでは、それぞれの学生が自分の興味をもった郷土の「場」について、スライドを用いて発表を行った。発表言語、視覚資料、発表方法などを評価項目とし、教員全員で協議を行った。発表トピックの例として、『赤飯』『横内上水』『青森平和記念象』『宵宮』など、授業内で日々目にするもの、ありふれていて違和感がないものに視点を向けて、そこから興味深いものを見つける「場」の考察がいかされたトピック選択であった。

ハイブリッド型授業

本学でのメディア授業は2020年度より Moodle および、Microsoft Teams を利用している。本授業実践では後者を利用して行った。また、ハイブリッド型授業は大きく表2のように3つに分類できる (Teaching Online@京大, 2022)。本授業実践におけるハイブリッド型とは、ハイフレックス型と呼ばれる方法で、本学総合教育2階イングリッシュ・ラウンジ・セミナールームでの対面参加と、オンライン参加者を対象に同時に授業を行った。

表2 ハイブリッド型授業

ハイフレックス型	同じ授業内容を、講師が教室で行い、対面の参加者とオンラインの参加者を対象に同時に方法
ブレンド型	対面とオンラインの授業を、その授業目的、教育効果に配慮して組み合わせる方法
分散型	同じ回に異なる授業内容の授業を対面とオンラインで行い、受講者を分散させる方法

高校生（ゲストアカウント）の Microsoft Teams 参加と課題

高校生の Teams への参加は、所属高等学校で配布されている個人 email を使用し、「ゲスト」として登録し、オンライン会議への参加を行った。そのため、会議参加時には、生徒個人の氏名ではなく email アドレス（例：pc105-0123）が表示され、指名する際に困難があった。また、Teams 内の『課題』機能を使用し、Forms で作成した授業振り返り活動を行ったが、その提出にもゲストアカウントであったため、『成績』一覧にはアドレスのみの表示になり、登録名簿との照合が必要であった。弘前大学の HiroinID を付与することには、さまざまなセキュリティー上配慮すべきことがあることがうかがえるが、授業参加の目的に制限した HiroinID は、出席、成績確認の点からも検討すべきであると考え。

この授業実践時に生じた Forms を Teams から課題として出題する場合の問題とその対応について表3に記す。

表3 ゲストアカウントの問題点とその対応

問題	Forms の課題にゲスト（高校生）がアクセスできない
原因	Forms へのアクセスが学内限定の既定となっている 手動で設定を「全てのユーザーが回答可能」に変更しても、Teams から課題で出題された場合、設定が「自分の所属組織内のユーザーのみが回答可能」へ自動的に変更される
対応	課題で出題された後、該当する Forms の設定を再度「全てのユーザーが回答可能」に変更する Forms の作成者と別のアカウントで設定を行う場合、「共有して共同作業する」からリンクをコピーし、再度別ブラウザで開いてから設定を行う

イングリッシュ・ラウンジにおけるハイブリッド型授業配信システム

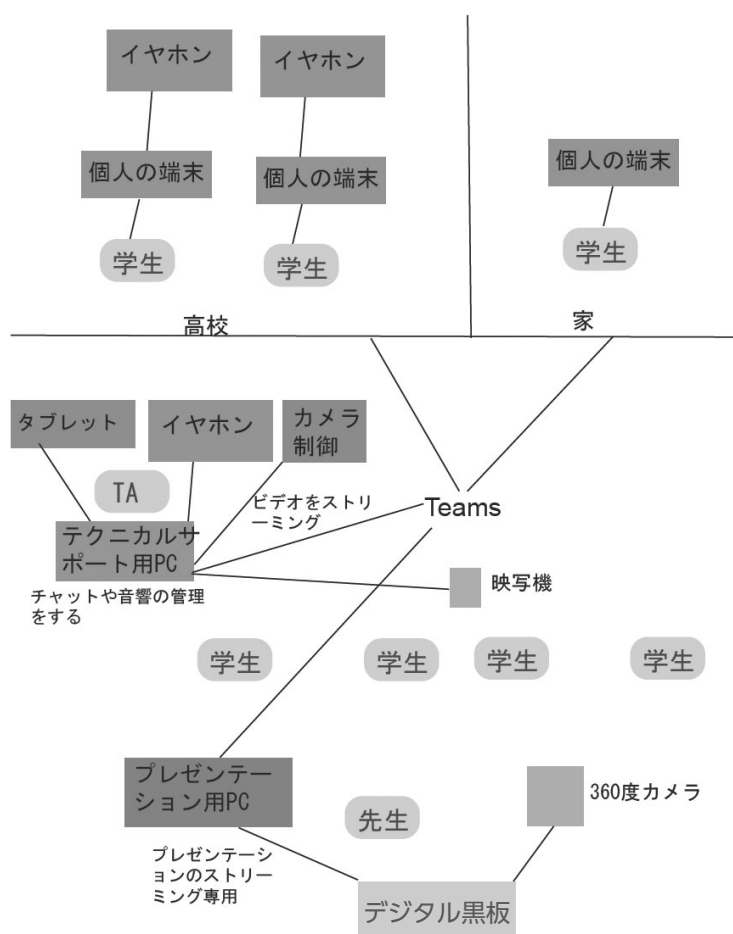
この授業の計画段階において、これまでイングリッシュ・ラウンジで行ったハイブリッド授業の経験を振り返り（ヤグノ他, 2022）、本授業を実施するために技術的必要条件を検討した。具体的には以下の必要事項が挙げられた。

- 1) 授業に必要なインターネット接続の帯域幅
- 2) 講師を映すのと同時に、大学の教室での参加者も映すことができる自動フォーカスカメラ

- 3) フレキシブルな座席配置
- 4) 黒板用カメラ、もしくは板書をデジタル化できる電子黒板
- 5) 授業の進行を妨げずにチャットや配信状況を確認できるよう最低2名の教員配置

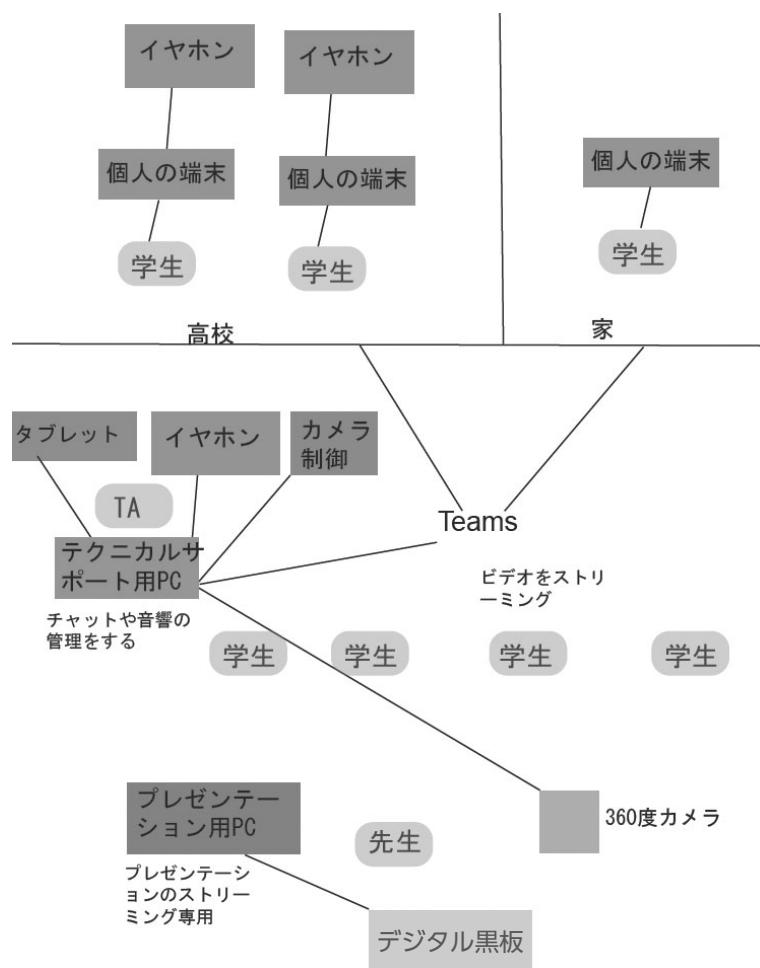
これらの事項を満たす教室として大学内の教室を検討したところ、机の移動が比較的自由的なアクティブラーニングルームである総合教育棟2階202教室も候補として考慮されたが、イングリッシュ・ラウンジ・セミナールームの方が、より小規模で音響的にもよいであろうと判断された。またこれらの必要事項から、360度カメラを設置し、すでに設置されている電子黒板にオンラインでの参加者を映し出すのと同時に、デジタル黒板としても使用した。図1にその模式図を示す。

図1 ハイブリッド型授業配信システム図1



授業を実際に進めるうちに、さまざまな弱点が見えてきた。360度カメラの画質は、帯域が狭くなると自動的に映像の画質が低下するため、オンラインで参加する高校生にとっては、少なからず不便が生じた。また、360度カメラは常に発言者を映すために、講師を映すためには再調整する必要がある、広角を映すことから映像に若干の歪みが生じた。このことから、あまり講師が動かずに講義を行う際には、2方向に設置した固定カメラを使用するのも有効であると考えた。しかしながら、今回選択したカメラ、及びその使用法は、本授業の目的に合致したものであった。また、授業を中断することなく迅速なカメラの撮影範囲の変更を可能にするためには、カメラを別のサポートPCに直接接続する必要があることがわかった。図2にその模式図を示す。

図2 ハイブリッド型授業配信システム図II



第5回授業、弘前れんが倉庫美術館のバーチャル見学では、美術館から提供されたカメラ付きPCと持参した携帯電話のカメラを使用した。携帯電話のカメラには手振れ補正機能が備わっており、その機能が有効に働いた。また、美術館が使用しているWi-Fiを使用することにより、画質の低下も最小限にとどめることができた。

授業をオンラインで受講することに関して、大学生はすでにその方法、またTeamsの操作にも慣れていることから、問題は生じなかった。高校生については、その生徒の技術に問題も見られる。自宅から受講した生徒に大きな問題はなかった一方で、高校の教室から参加した生徒に、マイクを使って参加する際に問題が見られた。ヘッドフォンとマイクを装備していたが、マイクの接続に問題があり、発言が聞こえないことがあった。また、ヘッドフォンは防音性によって選択するべきで、グループワークをする際にも、教室内の音ではなくマイクを通した音のみが聞こえる方が、グループ活動をする際に有用であると考えられる。

予期せぬ悪天候、また新型コロナウイルスの影響により、オンライン参加を選択する学生がおり、後半はオンラインのみの授業に移行した。それにより、授業の進行も変化した。ハイブリッド型を実施するための技術的な準備は軽減され、電子黒板の使用が必須のものではなくなった。しかしながら、配信システムを変更することはせずに授業を継続した。

ハイブリッド型の授業の質を高めるために、考慮すべき点をまとめると、1) デジタル黒板・デジタルホワイトボードを活用し、2) 360度カメラで、3) 高画質の映像を使用することで、あたかも教室に

いるかのように感じさせることが大事である。これらに加えて、技術補助のスタッフ（教員）やほかの技術を導入することは効果的かもしれない。しかしながら、オンライン授業に不慣れな担当教員の場合、必要以上の技術を用いると複雑すぎて授業の進捗に障害を与える恐れがあることを考慮するべきである。受講する高校生側としては、機材を充実させることが大切で、特に複数の生徒が同じ教室から参加する場合は、ノイズキャンセリング機能などが備わったヘッドセットを使用し、互いの声を直接聞けることを防ぐことによって、オンライン上でのペアワークや、グループワークなどの双方向的なやり取りが可能になると考えられる。

オンライン美術館訪問、オンライン古武術体験

本授業では、授業の目的に照らし、2回のゲストスピーカーによる講義を実施した。まず、第5回目授業において、弘前れんが倉庫美術館運営統括（弘前大学非常勤講師）小杉在良氏に美術館の歴史、建物の地域における存在意義、役割についてお話をいただいた。今回はハイブリッド型授業の利点を生かし、片桐、ヤグノが美術館を訪ね、そこから中継する形で授業を実施した。実際に美術館を見ることが少し異なるが、美術館の空間の中から講義をすることで、その場の雰囲気がつたわったと考えられる。学生のコメントから、形のないもの、歴史などを現在に生きる人が語り直すことによって繋いでいくプロジェクトを行っていることに強い印象を得たことが分かり、まさに身近にあることについて自分のことばで語る本授業の目標につながる学びとなった。

I learned the idea of making history acceptable to the present day by having people who were not born at that time talk about it again, rather than telling it as a “succession of memories.” In addition, the phrase “to create a future is to inherit memories” left an impression on me. As I looked into history and culture, I thought it was important to think about the future rather than just looking at the past. (学生コメント・原文)

この授業の実現にあたって、中継先のオンライン環境の確認が重要であった。弘前れんが倉庫美術館はHIROSAKI Free Wi-Fiの利用が可能で、今回の授業でもこれを利用した。HIROSAKI Free Wi-Fiは弘前市HPによると、「中心市街地のインターネット接続環境の高速化・容易化」、「当市を訪れる外国人を含む観光客やビジネス客の情報入手の利便性向上」を図るため、弘前市が提供している。本授業もこのWi-Fiを利用し行った。使用した機材等に関しては、前の章を参照いただきたい。

第10回目授業には、弘前大学非常勤講師で、北東北無形文化遺産実践研究会を主宰の下田雄二氏をイングリッシュ・ラウンジにお招きした。下田氏は弘前藩伝林崎新夢想流居合、並びにト傳流剣術の実践・研究をされている民俗学者である。2コマ連続の講義日で、前時間（第9回目）に教科書『Hokushin-do 北辰堂』を学習し、津軽において剣道が持つ歴史的な意味を学習した。下田氏には剣道以前、津軽藩で武士の鍛錬のために行ってきた古武術について、基本的な動きの解説、実演をお願いし、「型」について、また身体の動きと文化の関係について考えを深めた。当日は、下田氏他、同弘前伝林崎新夢想流稽古会会長外崎源人氏、弘前大学古武術研究会の大学生も実演に参加した。

『林崎流の特徴の剣の長さや、全身を使った体術についての話を聞いた。間合いの型で、間合いが変わることによる緊張感をコントロールするということを訓練していて、一見つまらない動きに見えてしまいが、重要なことを訓練しているのだと感じた。かつての生活や踊りなどにも古武術と同じ体術、同じ方の手と足を同じ方向に動かすナンバの動きがあったそうだが、生活の変容などによって、まだ一部は残っているがそれが日常からは見えづらくなっている。その生活様式は服装にも現れているというのが面白かった。着るものや使うものが変わると生活も変わるということが、より実感できた。』（学生コメント・一部抜粋）

この授業の準備として、イングリッシュ・ラウンジで使用するカメラの撮影可能範囲を確認すること

が非常に大事であった。2人での実演があったことから、全身がしっかり写る位置に設置し、また実演者も撮影可能範囲を踏まえて動く必要があった。動きがあるものを放送する際には、手振れ自動補正機能等が搭載され、画質もよいことからスマートフォンの活用も考えられる。

テキスト講読

前述のように、オンラインで行うので著作権侵害の心配がない、本教員の共作著書を使い、地元のことを語るための準備として、ボキャブラリーや文体を学んでもらうため、様々な身近な場所や事物を扱った英語の文章を読むことを行った。オンラインで音の聞こえやすさ、見やすさに配慮し、英文の質問を表記したスライドを使ったり、飽きないように教員が自分で撮ってきたビデオを入れたり、音楽や食べ物などの楽しい話題に触れたり、ゲストスピーカーの講義に沿ったテーマを取り入れた。生徒からのリフレクションには、内容についても英語で率先して書く者が多かった。

Today, I learned Anmon waterfall. I have never heard it, I was interested in it. Also, around Anmon waterfall, there are many things which we can enjoy such as insects, Mizukiri, beautiful view and so on. I have never played Mizukiri. But, I often watched entertainers who challenged Mizukiri on TV. For example, Miyagawa Daisuke played it on Itte Q which is variety show. If I or my friends get a car, I want go and experience nature. (学生コメント・原文)

受講者アンケート

履修放棄の学生1名をのぞいて、8名の履修者に対して、本事業改善を目的として、Microsoft Formsを用いて作成したアンケートへの協力を依頼した。実施した時期は、単位認定等がすべて終了した9月下旬から10月初旬である。高校生6名に対しては、高校側で本事業担当していただいている高木和彦先生を通じて行った。大学生2名にはTeamsのチャット機能を用いて直接アンケートへの回答を求めた。

また、授業期間中の振り返り活動の中にも、内容理解に関するアンケート項目があったことから、こちらも併せてここで論じる。

高校生の回答

まずは、本講義を受講した動機である。本学での教養教育科目の単位先行取得が可能であったことが、強い動機になり受講していたことが分かる。次いで、内容に対する興味、また英語を主要な言語として用いる授業であったことから、英語の能力を伸ばしたいという希望があった。

表4 受講動機（高校生）

本授業を受講した動機は何ですか？（複数回答可）	
弘前大学教養科目の単位が取得できる	6
内容に興味がある	2
英語を学習したい	1
高校の先生に勧められた	0
その他	0

各授業日毎に行った振り返り活動から、その授業での使用言語や内容に違いがあるため、理解度の選択（1）50%，2）75％以上，3）90％以上）にも差がある。前半に概念的な説明を行ったため、やや内容の理解が難しいと感じた履修者が多かったが、そこで理解したことを活かして期末プロジェクトにつながっている点からも、授業を重ねながら理解を深めたことがうかがえる。5回目以降の授業では、

すべての学生が75%以上理解していると選択している。

授業内容以外の困難点としては、機械的な問題が挙げられ、表6からわかるように、同時に受講している教室の仲間による助けが生かされたようである。この点については、なかなか大学教員が問題を解決することが難しく、事前の環境確認セッション等を行うことも考えられが、授業開始期に解消することができ、継続した問題ではなかった。

Teamsの『課題』機能を使用したFormsを課題としたが、設定として学外以外の回答を許可する設定をしなくてはならず、初回時に困惑させてしまった。このことに関して、メール、チャット等での問い合わせを高校生から受け、対応した。

高校にとっても夏休み期間から授業が開始したが、開講中に2学期が始まったため、高校の授業、部活動との両立が大変であったことがうかがえる。

表5 授業内容以外の問題点（高校生）

授業内容の理解以外で、困難だと感じたことはありましたか？（複数回答可）	
オンラインの接続、マイク、カメラなど機械的な問題	4
Teamsを使用した課題の作成・提出	1
ポスター作成等、授業準備のための時間確保	5
担当教員に質問すること	0
その他	0

表6 機械的な問題への対処法（高校生）

接続などの問題が起こった時に真っ先に相談した相手を知らせてください（複数回答可）	
高校の先生	2
大学の先生	0
同じく受講している仲間	4
家族	0
その他	0

本授業を通して自分のどのような能力が高まったかという問いに対して、英語の4技能、特にリスニング能力と、スピーキング能力、そして自分の考えをまとめて発表するプレゼンテーション能力が上げられる。また、地域に関する気づきも高まったとの回答を得た。本授業の目的である、CLIL（内容言語統合型学習）で、英語を学びながら自分の故郷のごく身近な文化に対する気づきを高め、それを調査し、英語で発表するということが達成できたと考える。

表7 授業後の能力についての感想（高校生）

この授業を通して以下の能力・知識が高まったと思いますか					
	全く そう思わない	あまり そう思わない	どちらとも いえない	すこし そう思う	非常に そう思う
リスニング				5	1
スピーキング				3	3
プレゼンテーション				2	4
地域に関する気づき			1	1	4
コンピューター能力			2	4	
調査・報告の 組み立て				5	1
ライティング			2	4	
リーディング			1	4	1
仲間と協力して 学習する		1		2	3

以下、自由記述欄へのコメントを一部文字の修正を加えて記述する。

『津軽の文化や歴史を知り、その活用方法などを学べた。』

『古武術や地域と古くから関わっているもの』

『青森の文化についてより深く知ることができた。』

『効果的なプレゼンテーションのやり方や調査のやり方について学ぶことができ、とても興味深かった。また、津軽の文化や歴史に触れ、郷土の面白さを再発見できた。』

『地元の魅力を再発見することができ、英語で自分の意見を伝える難しさに気づきました。プレゼンテーションの方法を学ぶことができたので、これからにいかしていきたいです。』

『英語を用いた実践的な活動は今後の役に立つと感じる』

大学生の回答

2名の学生からの回答が得られた。うち1名はイングリッシュ・ラウンジ受付業務を担当している学生で、もう一人は本授業以前にイングリッシュ・ラウンジを利用した経験はなかった。両名とも夏季集中講義であることが受講動機としており、うち1名は内容への興味も受講動機として選択している。

特に、憂慮していたのが単位認定される教養科目に、高校生が参加しているということである。このことに関する質問への大学生の回答を原文のまま記す。

表8 高校生との履修について（大学生）

本授業は高大連携事業として高校生も受講可能でした。このことについて、感想をお聞かせください。
高校生の受講生は積極的な方が多く、大学生の私もちゃんとしなきゃなと刺激を受けた。また高校生の方たちの方が地元でよりいろんなローカルなことを知っていて、色んな情報が聞けて楽しかった。
高校生の柔軟な発想など色々と得られるものが多かった

変則的な集中講義の開講日程となったため、当初登録していた6名のうち、3名の大学生が履修できず、最後まで履修した大学生は2名（途中までは3名）であった。授業内でも率先して発言するなど、授業に積極的に参加していた。また上記のコメントからも、高校生の参加を肯定的に受け止めていることが分かる。特に、授業の内容から自分の郷土のことに着目したことから、県外出身の弘前大学生にとって、青森育ちの高校生の視点を共有できたことが興味深かったようだ。着目する郷土は、もちろん自分の出身地や強く帰属意識を感じる地域で構わなかったのだが、今いる地域ということで、大学生も『弘前』『青森』を対象として考えていた。その部分の経験、知識として高校生が大学生に勝るとも劣らなかったことも、CLILの題材として『Tsugaru Life』を選択したことが肯定的に働いた。

高校教員の回答

高校の担当の先生とは、昨年度訪問した際に直接お話していたこともあり、その後は主にメールと電話にて、事前に高校側の行事、考査、休暇などのスケジュールについても打ち合わせを行った。前述のように受講時間中の対処すべきことがあるたび、携帯電話でのメッセージや、メールでの連絡を行うなどし、密に連絡を取り合った。コースの終了時点で今後のことを考えて、アンケートをとらせていただき、表9のように回答を得た。

表9 高校教員の回答

質問1	表記オンライン講座授業時の監督についてお伺いいたします。
	授業開始時のみで監督はしていない
質問2	表記オンライン講座、開講時期、受講時間帯の適切なものについてお伺いいたします。
	夏休み中午後、2学期授業開始後 水曜日4時

質問3	夏季集中講義は多くの場合1日3～4コマ（1コマ90分授業）ありますが、連続する授業について伺います。
	1日2コマ、複数週で開講
質問4	課題の提出について伺います。Teamsを使用しての提出、その他に関してはいかがでしたか。本校としては今回が初めての参加で、2回不具合がありましたが、原因も明確となり、今後の活動はよりスムーズにできると思います。よって現状の環境で問題ありません。
質問5	受講中、受講後の生徒さんについて、なにかお気づきの点がございましたらお知らせください。英語のリスニングに苦慮した場面もありましたが、それも含めて本講座受講の狙いであり、学びであります。なにより生徒が達成感、充実感を得られるプログラムであり満足しております。

スケジュールについてはほぼ今回の形態で追認をいただいた形となった。またテクニカルな問題としては前述にもあるように、高校側で解消していただけたため、問題が長続きすることはなかった。リスニングは双方ともに「受講の狙い」と考えるので、満足感を得ていただいたことには感謝である。

これからのハイブリッド型授業の継続に向けて

オンラインと対面を融合させたハイブリッド授業は地理的制限や、移動などの身体的制限を超えることができ、健康状況によって出校できない学生が受講できることや、夏休みの海外研修に出かけながらの受講が可能であるなど、ハイブリッドであるからこそその利点があり、受講生に対する便宜を図るという点では大いに有効であると考えられる。

抱える留意点としては、1) 前述したように、ハイブリッドクラスとしての適切な設備を整えること、2) オンラインならではの著作権の制限に留意すること、3) 集中講義の日程が広がるため、大学生にとって不利益にならないよう、日程を早めに決めること、4) 受講中の技術的な困難が生じたとき、連絡する方法を別途取れるようにしておき、時差が生じないようにすること、5) 履修者の数が多すぎても少なすぎても困るので、早めに設定をし、履修しやすくすること、などが考えられる。

また、今回教員間では一部行ったように、双方が直接会うことも今後は視野に入れ、例えば大学教員が高等学校に出向いて初回授業を行うことも、生徒に親しみやすさを持ってもらい、その後をスムーズに進めるためにも有効であるかもしれない。

2年後、令和6年度に、この高大連携公開講座が全学のプロジェクトとして、さらに発展的に成長する予定であるが、それ以前に我々の試行的取り組みがその良き前例として参考になることを祈念し、この報告書を取りまとめた。

謝 辞

本公開講座実施に全面的にご協力いただいた青森南高等学校 高木和彦教諭、本授業を履修いただいた青森南高等学校の生徒の皆さん、弘前大学の学生の皆さん、この企画の立案者である郡千寿子本学教育担当理事・副学長、高瀬雅弘教養教育開発実践センター長に感謝申し上げます。

引用文献

Teaching Online@京大. (2022, September 29). Contents for Next Education and Communication with Technology. Retrieved November 15, 2022, from <https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/>.
英語教育・国際交流・地域連携活動. (2021, April 1). 国際教養大学. Retrieved November 22, 2022, from https://web.aiu.ac.jp/wp/wp-content/themes/aiu/doc/exchange/brochure/outreach_brochure2022.

- 高大連携サマーチャレンジ2021開催報告. (2021, October 1). 東京工業大学. Retrieved November 22, 2022, from <https://www.titech.ac.jp/news/2021/061860>.
- 高大連携トピックス. (2018, July 16). 岡山理科大学獣医学部. Retrieved November 22, 2022, from <https://www.vet.ous.ac.jp/local/tp2/>.
- 高大連携・入試広報事業. (2022, March 12). 京都大学. Retrieved November 22, 2022, from <https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/admissions/koudai/pr>.
- 大学見学『栃木県立宇都宮南高等学校の皆さん』. (2022, July 7). 日本大学工学部. Retrieved November 22, 2022, from <https://www.ce.nihon-u.ac.jp/kodai-renkei/support-category01/support04.html>.
- 報告書－一人一人の個性を伸ばす教育を目指して. (2007, March 22). 文部科学省. Retrieved November 22, 2022, from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/020-17/houkoku/07032207.htm.
- 北海道大学の高大連携の取り組み～北海道登別明日中等教育学校からのインターンシップ生. (2016, March 17). 北海道大学. Retrieved November 22, 2022, from https://costep.opened.hokudai.ac.jp/like_hokudai/article/5195.
- ヤグノ ライク, 多田恵実, ソロモン ジョシュア リー, 片桐早苗, & バードセール ブライアン ジョン. (2022). 「弘前大学イングリッシュ・라운ジの高大接続の取り組み：オンラインで広がる新しい社会貢献」『弘前大学教養教育開発実践ジャーナル』, 6, 91-104.